

令和7年度 自己評価及び学校関係者評価書

令和 8 年 2 月 26 日

手稲	中学校
手稲中央	小学校
富丘	小学校
西宮の沢	小学校

1 手稲中学校区における学校関係者評価

分野	重点項目	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
			達成状況	改善方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
目指す子ども像	互いの個性や多様性を認め尊重し、思いやりや協力の心を育む教育を推進	子どもが安心して自分らしさを表現できる学校環境となっているか	A	子どもの相互承認に関するアンケート項目で肯定的な回答の割合が高く、目指す子ども像の達成に向けた取組が実を結びつつあると考える。自分の良さや成長を実感できる学校づくりをより一層図っていく必要がある。	A	A
学校関係者評価委員会(学校運営協議会)による意見		自己評価は、アンケート結果や教育活動の実態を踏まえた分析となっており、適切である。子どもが安心して自分らしさを表現できる環境づくりは着実に進んでいると評価できる。今後は、子ども一人一人が自らの成長やよさをより実感できるよう、承認や振り返りの機会を一層充実させることを期待する。				
人間尊重の教育	「学習活動づくり」「人間関係づくり」「環境づくり」を相互に関連させ、子ども一人一人が『自分が大切にされている』と実感できる学校づくりの推進	互いの違いや多様性を認め合い、思いやりをもって関わろうとする人間関係が、日常の学校生活の中で育まれているか。	B	相互承認に関する調査から、自己や他者を大切にしようとする意識は高い一方、自分が必要とされていると感じる実感には課題が見られた。今後は小中一貫して、子ども一人一人の役割や貢献が認められる人間関係づくりを推進する。	B	A
「学ぶ力」の育成	主体的に学び、深く考え、創造的に知性をみがぐ力の育成	子どもが自分から課題を見つけ、学習に取り組む姿勢が育っているか。	B	子どもは考えを整理し話し合ったり学びを生活に生かしたりする力が育っている一方、自分の意見を進んで発言し理由を明確に伝える力に課題がある。今後は伝える場面や振り返りを増やし、主体的な学びをさらに深める。	B	A
「豊かな心」の育成	思いやりや協力の心を育み、自己や他者の生命・感情を大切にすることの形成	他者を思いやり、互いに協力しながら関わる姿勢が育っているか	B	子どもは友達と協力したり相手を思いやる姿勢が育ってきている一方、自分の行動や言葉が相手に与える影響を振り返る力には課題がある。今後は日常や行事の場で思いやりや協力の心を意識的に育む取組を進める。	B	A
「健やかな体」の育成	強い意志と健康な体を育み、心身ともにたくましい児童生徒の育成	自分の体や健康を意識し、規則正しい生活や運動に主体的に取り組む姿勢が育っているか	A	子どもは運動や生活習慣を意識し、心身の健康に取り組む姿勢が育っている一方、体力向上や意志の継続には個人差がある。今後は運動指導や学校行事の連携を強化し、意志と体力をさらに高める取組を進める。	A	A
一貫性・連続性のある教育(小中一貫した教育)	小中一貫した学びの連続性を意識し、相互承認の感度を高める教育の推進	子どもが自分と他者の良さを認め合い、学びや活動の中で互いに協力・承認しながら成長しているか	A	子どもは、自分や他者の良さを認め合う姿勢や思いやりの心を育みつつあり、主体的に学びに取り組む場面が増えてきている。今後は、授業や学級活動、校種間の連携、家庭・地域との協働を通して、思いやりや協力の心をさらに深める取組を推進する。	A	A
学校関係者評価委員会(学校運営協議会)による意見		各項目の自己評価は、成果と課題を的確に整理しており適切である。主体的な学びや思いやり・協力の心は育ちつつあり、小中一貫した視点で相互承認を基盤とした取組が推進されている点は評価できる。示された改善方策も妥当であり、授業改善や振り返りの充実、校種間連携の強化を通して、子どもの資質・能力のさらなる向上を期待する。				

2 各学校における学校関係者評価

手稲中学校	スクールカウンセラーとの連携やいじめに関するアンケートを日常的な教育相談に活用し、いじめの未然防止・早期発見・早期対応に努めている。	A	全教職員が常に子どもに寄り添い、「シャボテンログ」や子どもが発する細かなサインを見逃さず情報共有に努めている。本校いじめ防止基本方針に基づく組織的かつ迅速な対応をする。	A	A	
手稲中央小学校	毎月いじめ防止対策委員会を実施して情報を共有すると共に、日常的に様々な立場の職員が協力して児童の困りに対応した。また、過年度情報を基に、確実に引継ぎができるようなシステムのもと、継続して指導することができるよう努めている。	B	研修も実施し対応力は向上しているが、一方で問題が複雑化・多様化し、対応案件は増えている。今まで以上に、保護者・地域・関係機関との連携を強化していく必要がある。	B	A	
富丘小学校	いじめの早期発見・早期対応に向け、いじめ対策委員会を月1回定期開催し、全児童の状況把握に努めた。また、事案発生時や予兆が見られる際には「臨時いじめ対策委員会」を開催し、担任一人に抱え込ませない組織的な対応を徹底した。その際、スクールカウンセラー(SC)やスクールソーシャルワーカー(SSW)といった専門家と交え、専門的知見に基づく多角的な助言を得ることで、個々の事案に応じた適切な支援体制を構築した。	A	いじめの定義を再確認し、教員の主観に頼らない組織的な判断基準を徹底する。経過報告の定型化により、保護者への透明性を高め、安心感を与える対応を推進する。スクールカウンセラー等の専門知見を活用し、未然防止と早期解決の両面から実効性ある体制を構築する。	A	A	
西宮の沢小学校	年2回、いじめや悩みに関するアンケート及び個別の面談を実施。「シャボテンログ」の活用と併せて、子どもの声を聴くことを中心に、いじめの未然防止、早期発見・早期対応に努めている。	A	今後も、いじめ防止等対策委員会を定期的に開催し、いじめの認知から解消まで、スクールカウンセラーを含む職員全体で情報を共有し、組織的にいじめ対応に努めていく。	A	A	
学校関係者評価委員会(学校運営協議会)による意見		各校において、定期的な委員会開催やアンケート・面談の実施、専門家との連携など、組織的な対応が図られており、自己評価は適切である。今後は家庭・地域・関係機関との連携を強化し、透明性を保ちながら未然防止と早期対応の充実を図ることを期待する。				